

アカデミーキャンプ – 集団生活を通じた遊びと学びの空間醸成

Academy Camp – Fermenting Play-and-Learn Space through Communal Living

齊藤 賢爾*1

Kenji Saito

中村 俊介*2

Shunsuke Nakamura

黒澤 伸一郎

Shinichiro Kurosawa

緒方 大輔*3

Daisuke Ogata

南 政樹*4

Masaki Minami

*1慶應義塾大学

Keio University

*2キャンプインストラクター

Camp Instructor

*3プロジェクト結コンソーシアム

Project Yui Consortium

*4駒澤大学

Komazawa University

Academy Camp is a series of play-and-learn programs in the form of camping, especially targeted for elementary and junior-high school students in Fukushima prefecture who have been spending stressful lives both mentally and physically, because of the Great East Japan Earthquake and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident of Tokyo Electric Power Company.

In this report, we describe the camps, and try to evaluate the observed mental and behavioral changes not only for participating children but also for surrounding adults including volunteer college students, through the camps we organized in 2011 summer and 2012 winter.

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、特に東北地方の太平洋沿岸地域に大きな被害をもたらした。更に、震災に付随して発生した東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染は、東日本の広範囲に、ICRP (国際放射線防護委員会) が分類する「現存被ばく状況」[ICRP 09]をもたらしている。これは、事故後、住環境に長期の放射能汚染が見られる状況であり、ICRPは、そのような状況下における生活について、特に小児のように放射線の影響を受けやすい人々の放射線被ばくが、合理的に達成可能な限り低減される施策の計画・実施を勧告している。

放射線被ばくの低減に向けては、日々の生活において気遣いが必要であることは勿論だが、震災による被災の影響に加え、放射線を気にする日常を送ることで、子どもたちはストレスにさらされることになる。そうした心身のストレスを解消する方法のひとつは、放射線量が比較的低い地域に頻りに保養に出かけることである。

そうした背景から、2011年の夏休みには、文部科学省が福島県をはじめとする被災地の児童の保養を推奨し、企画をポータルサイト [文科省 11] にまとめたこともあり、被災地の子どもたちを対象とした数多くの保養イベントが盛況のうちに実施され、その幾つかはその後も活動が継続されている。

筆者らは、大学教員、キャンプ指導者、および、子どもたちを支援する非営利団体メンバの集まりであるが、**福島のごどもたちとその家族に笑顔を**、という思いを共有し、2011年の夏休みより、以下の特徴を持つ「アカデミーキャンプ」(<http://academy-camp.org/>) を企画し、実施している。

- 『福島のごどもたちのためのキャンプ』である。
- 『「これから生きていく力」をつけるためのキャンプ』である。

- 『最高の学びを体験する場としてのキャンプ』である。

この活動では、大学人としてできることや、キャンプ運営の知見、そして、子どもたちの支援のためのノウハウが組み合わさることにより、ユニークな遊びと学びの空間が醸成されたと考えている。

本稿では、アカデミーキャンプの狙いと実績を説明し、その評価を試みた上で、今後の課題を明らかにする。

2. キャンプの目的

アカデミーキャンプは、以下の目的を達成するための仕組みであると見なせる。

標語 1 福島のごどもたちのためのキャンプ

第一に、震災や原子力発電所事故によって、心身ともにストレスにさらされている福島のごどもたちに、「大自然の中で思い切り楽しい時間を過ごしてもらう」ことを目的とする。

また、子どもたちには長期のケアが必要であるが、それは、子どもたち自身の問題ではなく、むしろ、その周囲の問題である。この問題が他人事ではなく、もし自分の事とは思えなかったとしても、自分たちの社会の問題、すなわち「自分たちごと」[加藤 10] として当事者意識を持ってもらう必要がある。

標語 2 「これから生きていく力」をつけるためのキャンプ

様々な困難の中を生きていくことになる次の世代が、集団生活の中で仲間を作りながら、自分たちで創意工夫して遊びと学びを体験することを通して、「これから生きていく力」を身につけていくことを狙う。

そうした力を身につけていくことは、勿論、福島県外のごどもたちにとっても必要であり、更には、小中学生だけでなく、高校生、大学生、そして社会に出ている若者たちにとっても必要と言える。

アカデミーキャンプは、そうした、次に続く世代に、大人たちが自らの経験や知見を伝える場でもある。著者らは、このキャンプを、次世代に「バトンを渡す」活動であると捉えている。

連絡先: 〒 252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス 村井研究室

齊藤 賢爾 (ks91@sfc.wide.ad.jp)

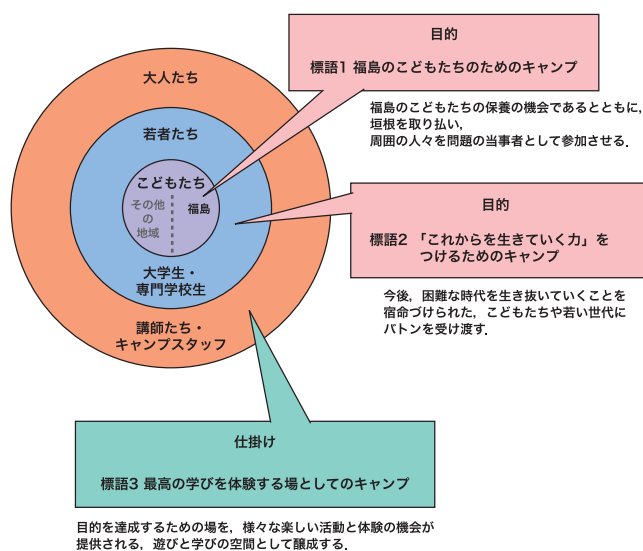


図 1: 遊びと学びの空間醸成という仕掛けの意味

3. 手法

以上の目的を達成すべく、アカデミーキャンプは次のような仕掛けとして機能する。

標語 3 最高の学びを体験する場としてのキャンプ

筆者らは、アカデミーキャンプが、すべての参加者が相互に学び合える、いわば「最高の学び」を体験する場となるようなデザインを試みた。通常のキャンプの要素に加え、後に 4.3 節で述べるような、大学教員・研究者や、企業人、アーティスト、アスリートらによる、彼らの専門分野のワークショップをふんだんに採り入れたプログラムとして構成している。

このキャンプは、趣旨に賛同した多くの大人たちが、自身の専門的な知識や経験を子どもたちに対して真剣に向きあって伝える機会である。同時に、そのことを通して、大人たちは子どもたちから学ぶ(教えることは最大の学びである)。また、大学生を中心とする学生ボランティアも、子どもたちと関わることを通してリーダーシップを身につけ、未来をリードしていくためのトレーニングを積む。こうした「学び」の要素を重視しているため、アカデミーキャンプでは、あえてキャンプ経験のない学生ボランティアを多く起用している。

キャンプの場が、こうした作用を持つ、楽しい空間として醸成されることにより、図 1 に示すように、まず、福島の子どもたちが楽しい体験をすることを狙う。かつ、子どもたちと直接、接する機会を提供することで、物理的・心的な垣根を取り払い、若者たちや大人たちを含む周囲の人々に、問題の当事者意識を持ってもらうことを狙う。また、集団生活やその中の様々な体験を通して、子どもたちや若者たちが、これから生きていくための力を身につけることを狙う。

若者たちや大人たちは、標語 1 や標語 2 のために参加することで、それぞれ、この仕掛けの中に取り込まれ、逆にその影響を受けることになる。

4. 実施内容

4.1 日程と人数

以上の考えに基づき、国際青少年センター東山荘(静岡県御殿場市)にて、2011年夏(8月)に3期間、2012年冬(1月)

に1期間、小学4年生～中学3年生を対象としたキャンプを実施した。表 1 に日程と参加人数を示す。

第3期の参加人数が少ないのは、キャンセルが多かったためである。36人、申し込みが確定していたが、最終的に10人がキャンセルした(兄弟・姉妹での参加申し込みも多く、キャンセルはしばしば、まとまって発生する)。当日の病気もあったと思うが、学校の夏休みの終了が早かったことが主な理由と考えられる。

アカデミーキャンプは様々な団体や個人からの支援により成り立っており、第1～3期の参加費は無料としたが、参加日程も踏まえて慎重に申し込んでもらう意味で、第4期については参加費1人3,000円を徴収した。

4.2 実施体制

キャンプの現場では、子どもたちは5～7人ずつ分かれてグループを形成する。プログラム参加時には男女混合の行動班、入浴・就寝時等には男女別の生活班を、それぞれ形成した。

スタッフは、以下の役割に分かれる実施体制をとった。

ディレクタ: 1名。

キャンプ全体の計画・実施に責任を持つ実施責任者である。

プログラムディレクタ: 1名。

学生リーダーたちを束ね、キャンプの進行を司るキャンプ指導者である。

マネジメントスタッフ: 3名程度。

ロジスティクスを司り、キャンプを裏から支えるマネジングディレクタとそのアシスタントである。

学生リーダー: 5～9名。

頼れる兄・姉として子どもたちのグループに入って一緒に行動し、かつ、子どもたちの安全確保を行う。

サポートリーダー: 3名程度。

学生リーダーをサポートする。特に初期のキャンプにおいては、経験のない学生リーダーが十分に活躍できるかが未知であったため、キャンプ経験者を配置した。

看護リーダー: 2～3名。

子どもたちとスタッフの健康をサポートする。

第3期からは、プロの看護師の監修のもとで、看護学生(慶應義塾大学看護医療学部)を看護リーダーとして起用する試みを始めている。

4.3 プログラム

以下に、専門家による多彩なプログラムの一部を、タイトルと講師だけであるが紹介したい(敬称略)。

大学教員・研究者によるプログラム

- 星空を眺めよう(東京大学 高梨直絨)
- 「触れる地球」で生きている地球を体感しよう(京都造形芸術大学 竹村真一)
- 生き物と結晶とナノの世界(慶應義塾大学 緒明佑哉)
- 思い出を切り取ろう(駒澤大学 南政樹)

表 1: 日程と人数

期	期間	参加者	学生リーダー	学生看護リーダー
第1期	2011年8月7日(日)～12日(金) 5泊6日	41人	9人	0人
第2期	2011年8月16日(火)～20日(土) 4泊5日	37人	9人	0人
第3期	2011年8月21日(日)～26日(金) 5泊6日	26人	9人	2人
第4期	2012年1月4日(水)～8日(日) 4泊5日	33人	5人	1人

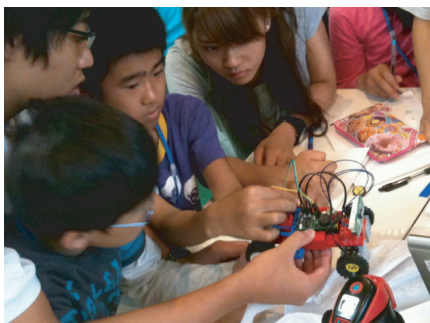


図 2: マイコンとレゴブロックでロボットを作る (第3期)



図 3: 自由に絵を描く (第3期)

- ロボットはいつか心を持つのかな？ (慶應義塾大学 齊藤賢爾) (写真: 図 2)
- 1千万分の1の地球の模型をつくろう！ (慶應義塾大学 齊藤賢爾)
- ピタゴラ装置をつくろう！ (慶應義塾大学 田中浩也)
- 遷画～シルクロード (国立情報学研究所 北本朝展)

企業人によるプログラム

- フィジカルコンピューティング！ (IIJ 技術研究所 島慶一)
- Kinect で遊ぼう！ (日本マイクロソフト)
- 鉄道の安全は、どうやって守られているの？ (JR 東日本有志 犬塚史章)
- CPR 学習プログラム (レールダルメディカルジャパン)
- 空き缶を彫金して自分だけのペンダントやキーホルダーを作ろう (ミツバチ&アダン)
- 再生紙を使った、手作り葉書教室 (森永乳業)

アーティスト・アスリートによるプログラム

- プロカメラマンからテクニックを学ぼう (写真家 土屋勝義, モデル 滝沢カレン)
- イラストワークショップ (イラストレータ 箱崎秀明) (写真: 図 3)
- ボディペインティングに挑戦 (アーティスト 山崎那菜)
- 即興芝居に挑戦！ (即興パフォーマンス・ユニット 6-dim+ ロクディム)
- 口琴ワークショップ (ボイスパーフォーマー 徳久ウィリアム)



図 4: 富士山麓にて集合写真 (第3期)

- ミニバイクに乗ってみよう (プロレーサー 辻本聡)
- テコンドー体験 (阿羅漢テコンドー道場 林直美)
- フットサルを楽しもう (湘南ベルマーレフットサルクラブ)

その他のプログラム

その他のプログラムとして、ドッジボールなどの屋外スポーツ、富士山麓にて軽微な登山や山遊びを行う富士さんぼ (写真: 図 4)、バーベキュー、キャンプファイヤーなどの定番の野外活動や、ひとつのテーマを対話により掘り下げ、発表する「こども熟議」などを実施した。また、声をそろえてキャンプソングを歌うことや、チームビルディングのための様々なゲーム、集団生活そのものが、参加者全員にとって楽しく、キャンプの中核的な活動だった。

5. 評価

筆者らは確かな手応えを感じているものの、福島の子どものための保養のプロジェクトとして緊急的に始まったこともあり、これまでのところ、評価の仕組みを入れずに実施してしまったという反省がある。

ここでは、客観的に捉えることができる評価項目として、リピータの人数と学生(看護)リーダの継続スタッフ化の人数を示し、主観的な評価の表れとして、スタッフ・講師やこどもたちの感想を抜粋する。

5.1 リピータ

キャンプに参加したこどもたちが、次回のキャンプに再び来てくれることは、保養企画としての高評価の表れと考えられる。2011年夏の3期間のキャンプの参加者のうち、15人が、2012年冬のキャンプにリピータとして参加してくれた。これは、冬のキャンプの参加者の約45%にあたる。

5.2 学生(看護)リーダの継続スタッフ化

こどもたちと接した学生ボランティアたちが、引き続きキャンプの企画・運営に関わることを希望するのは、目的に沿う方向への行動の変化の表れと言える。

70人の応募の中から採用した総計33人の学生ボランティアのうち、8人がその後のスタッフとして継続的に参加し、1人がアカデミーキャンプの主催団体のひとつである「プロジェクト結」に参加、数名がYMCA キャンプに参加している。

5.3 スタッフ・講師の意識的变化

筆者らは、慶應義塾大学 SFC 研究所主催の SFC Open Research Forum 2011[SFC 11] 内のセッションにて、現在はスタッフとして継続的に参加している学生(看護)リーダにインタビューを行った。インタビューでは、当初は「こどもたちのために何かをしてやろう」という意識で参加したが、キャンプが始まると、「一緒に楽しむ」ことに変化した、という発言も聞かれた。また、看護リーダとして参加した学生は、このキャンプを通して、将来、看護師として働く強い動機づけが得られたと発言した。

講師陣は、口を揃えて、機会があるならまた参加したい、と述べており、社交辞令である可能性はあるが、実際に第4期の実施にあたっては夏に参加した大学教員からの申し出があり、また、第1期への参加をきっかけに、これまでの4期を通して継続的に参加してくれている企業人たちもいる。

5.4 こどもたちの作文から

キャンプの実施に協力してくれた小学校の教諭が、参加者の中から、19人のこどもたちが書いた作文を送ってくれた。その中から3人のこどもたちの作文の内容を短く抜粋して紹介したい。

- 私たちは、これからいろんな問題にたちあうことになると思います。そんな時、アカデミーキャンプのことを思い出して、心の支えにしたいと思っています。
- 私は、またアカデミーキャンプが開かれたら、ぜひ参加したいと思っています。私たちは、アカデミーキャンプを開いてくださったみなさんのことは、忘れません。アカデミーキャンプのみなさんも私たちのことを忘れないでください。
- 僕は、最初はきつといつも通りのただのキャンプだと思っていました。しかし、想像をはるかにこえるとてもおもしろいキャンプでした。

この文章を書いた3人のこどもたちは、第1期のキャンプに参加し、その感想を書いたのだが、彼らは第4期にも実際にリピータとして参加してくれた。

6. おわりに

6.1 まとめ

本稿では、福島の子どもたちのための取り組みであり、大人たちから若い世代にバトンを渡す活動であるアカデミーキャンプについてまとめ、評価を試みた。

4期間を通してのべ約140人の小中学生が参加し、2011年の夏(3期間)に参加した104人のうち、15人が2012年の冬(1期間)に再び参加している。70人の応募の中からボランティアとして採用した33人の学生のうち、8人がアカデミーキャンプのスタッフとして継続的に活動に参加し、また、数名が主催団体での活動に参加するという行動の変化が起きている。

6.2 今後の実施計画

筆者らは、この活動に手応えを感じており、長期にわたって続けていくつもりである。2012年夏(8月)には3期間の実施を行うべく準備を進めている。今回は静岡ではなく、東京・千葉・埼玉にてそれぞれ実施する予定である。

6.3 今後の課題

福島の子どもたちと、他都道府県の子どもたちとの交流はひとつの課題である(図1の破線を取り扱う活動)。

この活動を研究として続けていくことには葛藤がある。こどもたちも学生たちも研究の対象ではないからである。

しかし、何であれ、目的をもって実施するならば、その目的がどの程度達成できているかを評価し、計画にフィードバックをかけていかなければならない。その意味でアカデミーキャンプ自体が「仕掛け」としての研究の対象である。関わるすべての人々にキャンプを評価してもらい、福島の子どもたちとその家族に笑顔をもたらせるように、そして、「自分たちごと」として、福島のことや、今後の日本や世界のことを考えられる若者たちが増えるように、今後も活動を続けていきたい。

謝辞

第1~4期のキャンプを実施するにあたり、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、公益財団法人東日本大震災復興支援財団、および香港バプティスト大学 日本文化研究会より寄付を頂きました。また、公益財団法人日本YMCA同盟からは、寄付を含めた様々な支援を戴いています。その他、様々な形で支援や協力を戴いた大勢の皆様方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

また、2012年夏の実施については、既にJCIE 東日本大震災復興支援プログラム メットライフアリオ社員寄付子ども支援プログラムから助成を受けている他、筆者らの呼びかけに応じて募金をしてくださった方々がいらっしゃいます。ここに感謝の意を表させていただきます。

参考文献

- [ICRP 09] ICRP : ICRP Publication 111 原子力事故または放射線緊急事態後の長期汚染地域に居住する人々の防護に対する委員会勧告の適用, 日本アイソトープ協会 (2009)
- [加藤 10] 加藤文俊研究室 : fklablog | :: 「自分たちごと」について (2010), <http://fklab.net/blog/?eid=533>
- [SFC 11] 慶應義塾大学 SFC 研究所 : SFC Open Research Forum 2011 - 学問ノシンカ (2011), <http://orf.sfc.keio.ac.jp/>
- [文科省 11] 文部科学省 : 東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト (2011), <http://manabishien.mext.go.jp/>